※これが魔王の日常です！！

柳葉　ししゃも

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこにでもありそうな町のここでしか見れそうにない話。

夕日が沈む街に耳を澄ませば聞こえるはず・・・

２次元という世界を支配しようとする魔王の声が・・・

これは『非日常による非日常な日常の話』

目　次

非現実のプロローグ ―――― 1

非現実のプロローグ

この街に朝日が昇る。
冬の冷たい空気がほんのり暖かくなり目覚める。
今日も相変わらず寒い。
布団という神から授けられた羽衣をとり冷え切った部屋へ出るか、出ないかで、
数十分の時が過ぎた後、朝食の買い物のことを思い出し、
ため息混じりに神から授けられた羽衣をとった。
身支度を早めにすまし朝の街へと出る。
もうすでに外はかなり明るくなっていた。
急いでいて時計を忘れていたが、おそらくもう7時ぐらいだろう。
白い息を吐きながら、足早に商店街へと向かう。
商店街の道のわきにはシャッターを開け出す人々がちらほらと見えだした。
私のすぐとなりを服を着込んで余裕の表情で駅に向かうサラリーマンや、
友人としゃべりながら歩く女子高生が通り過ぎる。
もうすぐ、目的の小さな商店につきかけたときに、

ほとんど鳴らなかった携帯のバイブ音が流れる。
目的の前で邪魔された苛立ちを抑えながら、
「スマートフォン」と呼ばれている携帯を取ると、
家の番号が画面に表示されていた。
家には私を含め２人しかいないから、誰が電話してきたのかは、すぐに分かった。
面倒だったが、出ないわけにもいかず、『通話』と表示されているところを押す。
すると、やけにひょうきんとした声が携帯から流れ出した。
「あ、もしもし～噂のあの人ですよ～今どこいいます？」
いらつく。
普段は起こらない私だが、さすがにイラッときた。
その影響か、少しトーンを落として、
「噂にすらなっていません。そもそも、あの人って誰です。今は商店街にいますよ。」
簡潔に言葉を伝えると、電話から予想外な言葉が流れた。
「なんで商店街にいるのさ？」
この人は記憶力もないのか。昨日あんたがしゃべったんだぞ。
そんな事を頭に浮かべながら、声を荒げる。
「あんたが朝食の買い出しに行ってこいと言ったでしょうが!!」

・・・毎日このような感じなんですよ。
いや、私は毎日は怒っていませんがね・・・